

岩手に復興の槌音を聴く 第 68 回 全国漁港漁場大会 in 岩手 議員 木村 諭 史

10月31日に岩手県民会館大ホール（盛岡市）にて開催される全国漁港漁場大会に参加すべく、10月30日の朝から新幹線で議員4名が東京駅を出発した。盛岡駅にて村長の出迎えを受けたのち、東京都漁港漁場協会として参加者40名の一行は、貸し切りバスにて二か所の漁港を視察した。



●漁港視察：震災の傷跡と、復興の現状を肌で体感

宮古漁港では直売施設『シートピアなあと』にて、『震災～復興の道のり』と題した説明を受け被災と復興の現状を共有した。魚市場も見学したが、各施設の外壁に記された津波到達点が印象に残った。

次の田老漁港でも津波被害の詳細と堤防の建設現場の説明を受けた。建設中の高さ 28 m 幅 1.2 k m の巨大防潮堤や、津波により 4 階まで被災した震災遺構『たろう観光ホテル』を見学した。いずれの漁港でも震災の傷跡に負けじと、加工品づくりと販売の熱気に圧倒された。

●学びと熱気に包まれた地方大会ならではの講演

今回は岩手大会ということで、講師は全国からではなく、地元で立場が異なる 3 名の講師が発表した。岩手県漁港漁村協会の会長の大井氏、岩手県漁協女性部連絡協議会の会長の盛合氏、そして綾里漁港青壮年部の佐々木氏であった。

大井氏の講演では初動体制の重要性において、『漁協を核としながら、地域が一丸となって復旧・復興への取組が重要』とまとめられた。その中核である漁協において、被災の有無、被害の程度も個人差があったが、船に乗り合いで漁業をしていくなど『助け合いの鉄則』とリーダーシップの重要性についてしみじみ感じさせられた。

盛合氏の、息の長い生活や地域の笑顔に密着した活動にも海に生きる人のしなやかな力強さを感じた。被災当時は地域の人々は生活や将来に強い不安を感じていて、生活状況や考え方もバラバラであった。そこで地域を元気づける活動として、『ふれ愛バザー』や『浜のかあちゃんの大運動会』などが実施されたそうだ。

そして最後は『人とのつながりを生かした水産業の振興』をテーマにした佐々木氏の講演であった。小石浜をもじった『恋し浜ホタテ』など目を引くネーミング・商標登録はもちろん、食材と情報誌がセットになった定期購読『食べる通信』など直送販売も行っている。

生産現場に訪れたいという消費者の声と行動に後押しされ、漁業者が地元の水産物を紹介して交流できる『浜の学び舎』が設立され月 1 回開催されている。消費者との協働による水産物販売も活発化し、アンテナショップも石巻にオープンした。特産品を販売するだけでなく、人の共感を軸に消費者から支援者になっていく大きな物語を感じさせられた。東京オリンピック・パラリンピックの動画にまで採用された一連の成果は心を揺さぶり、高揚感で会場を満たした。



漁港漁場大会の盛岡会場。

●講演のハイライトで新島が登場！

佐々木氏の講演のハイライトでは『恋し浜ホタテ』の協働販売活動の事例として、東京都で我々が新島村が紹介された。新島島民と島外のメンバーと一緒にホタテを焼いて販売している見慣れた島民祭りでの姿が会場に映し出された。新島にもこのような生産者や消費者を飛び越えた共感・つながりが届いていることと、それを体現している人たちが新島村に居てくれることを誇らしく感じた。